

筑紫野市曖昧アクセント : その一型化への途

稲川, 順一

<https://doi.org/10.15017/2332706>

出版情報 : 文學研究. 75, pp.25-44, 1978-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

筑紫野市暖昧アクセント

— その一型化への途 —

稲川 順 一

九州の西北部から東南部にかけての広範な地域で一型アクセントが行なわれている。その一型アクセント（「無アクセント」）地帯の周辺に暖昧アクセントと呼ばれるアクセントを聞くことができる。これは型の区別が崩壊して一型になりつつある過程のものとされる。

この論文は筑前式アクセント（東京式アクセントより型の数が一少い）が、その南部の筑後一型アクセントと接する地、福岡県筑紫野市及びその付近のアクセント報告である。ここでは既に福岡市のように明瞭な高低アクセントは聞かれない。

地理的位置 筑紫平野と筑後平野の接する地帯で、東西両側には山陵が迫りその間の平地を種々の交通機関が通り抜けている。また純然たる農村地帯である。

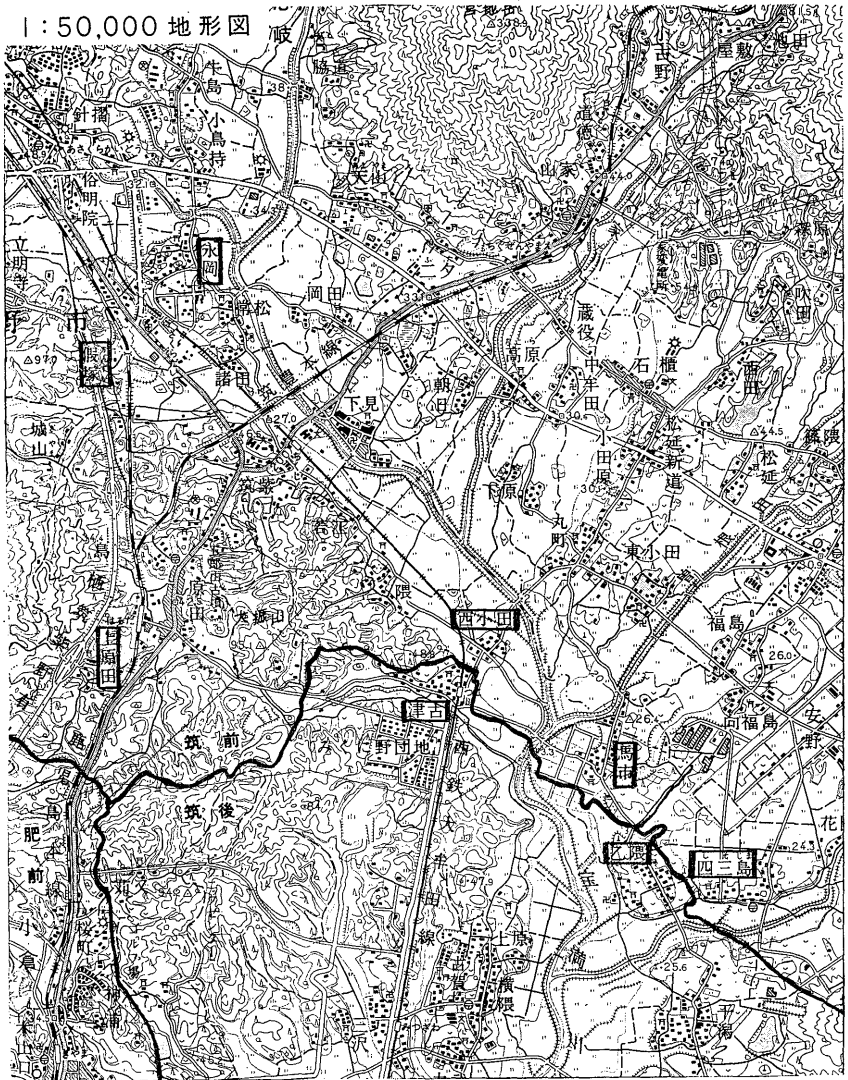
調査地点は左記の通り。

|| 筑前 ||

- 筑紫野市の旧筑紫村地区 うまいち 馬市 にしおだ 西小田 もろたかづか 諸田假塚 ながおか 永岡 かみはるだ 上原田
- 朝倉郡夜須町 しそじま 四三島

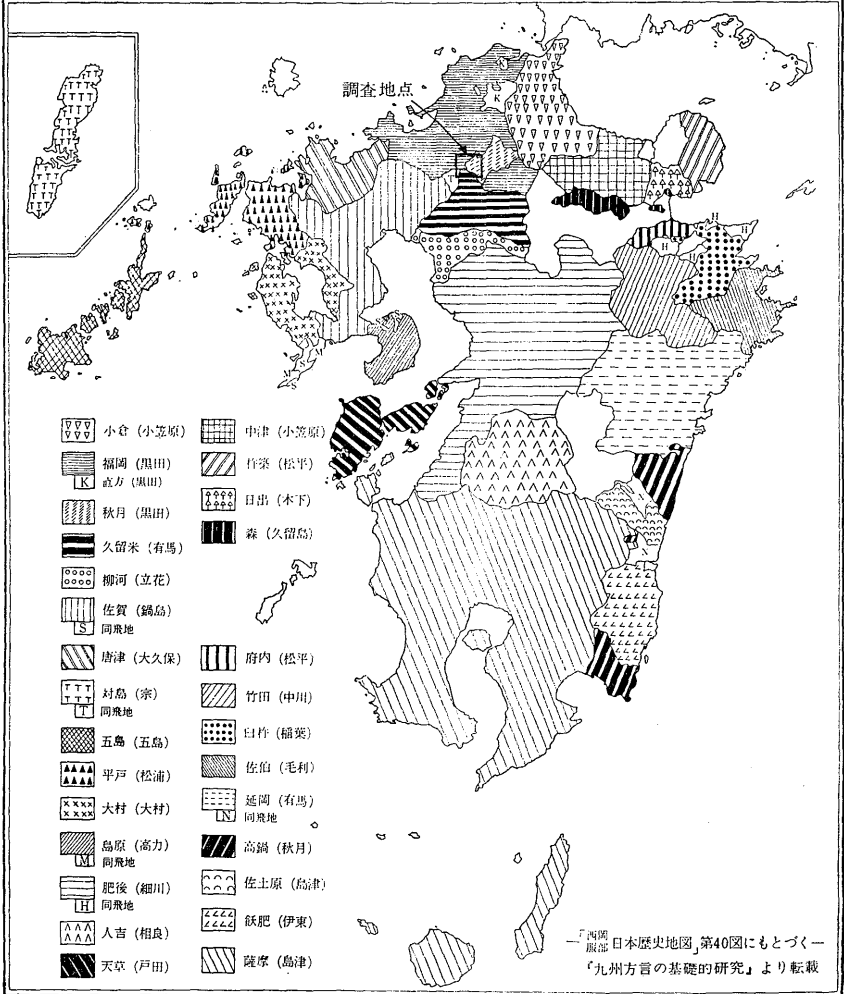
筑紫野市暖昧アクセント（稲川）

1:50,000 地形図



九州藩別地図

1664年(寛文4年)



Ⅱ 筑後Ⅱ

○小郡市 おとごま 乙隈 つて 津古

調査地点は筑前と筑後の境界線に沿った村落を選んだ。

被調査者はいずれも六十歳以上。長期間の転出歴のある人は省く。

現在までにこの地区のアクセントを報告した文献として平山輝男氏の著書・論文がある。以下同氏著『九州方言音調の研究』(『学界之指針社』昭和二十六年刊)から引用すると、

三養基郡(佐賀県)は中原・鳥栖・基山など全部一型音調で、更に筑紫郡(福岡県)南部の筑紫村に食い入る。

従って一型音調と特殊音調との境界線はここから県界(国界)を離れて、二日市・御笠の南、筑紫村の北部を通
過し、筑紫・嘉穂の郡界に延びて南下し、嘉穂・朝倉の郡界を辿って東南へ進む。即ち筑前の国から一型音調の
行なわれる秋月・三輪・夜須・甘木・蟠城(以上朝倉郡)などを区切るのである。(二四六頁)

氏の報告によれば筑後の一型アクセントが藩境を越えて筑紫村(筑前)にまで浸入しているとのことである。(現在の筑紫野市は、旧筑紫村・御笠村・山家村・山口村・二日市町が合併して出来たもの) 此の平山氏の記述を基
に、調査を行った。

△注、曖昧アクセントⅡアクセントの型の高低の差が少なくて、型の区別も微妙である。しかし話者が静かに落ちつ
いてもっとも自然な状態とする発話の中では、体系的にアクセントの型の区別があるが、話者が緊張したり、不自然
な環境におかれたりすると、アクセントが動いて実現されることがある。
(「なぜ日本語アクセントは開壊し
やすいか」平山輝男・人文学報99号) √

調査時期は昭和50年。すべての被調査者にアクセント認識能力が無かったし、中には全くの一型アクセント保持者

もいた。しかし、アクセントの認識ができないからと言って発音に際しても型の区別が現われないとは必ずしも言えないのである。(例えば福岡県宗像郡の被調査者には型の知覚が全くないにもかかわらず型の対立が見事にあらわれた)

《調査語彙》

二拍名詞百二十四語を調査の対象とした。一く五類各二十五語(二類のみ二十四語)、また第二拍の母音の広い語と狭い語とがほぼ同数になるようにした。

味 飴 蟻 烏賊 魚 牛 梅 枝 海老 岡 沖 顔 柿 駕 風 蟹 金 壁 蚊 張 雉 子 傷 客 霧 口
国 (以上一類)

石 岩 歌 音 垣 紙 川 北 鞍 旅 知 恵 弦 寺 梨 夏 橋 旗 肱 人 昼 冬 町 胸 村 雪
(以上二類)

足 網 家 池 犬 色 腕 馬 膿 裏 襟 鬼 親 貝 鍵 髮 菊 草 櫛 靴 雲 栗 米 坂
(以上三類)

麻 跡 粟 息 板 糸 稻 白 瓜 運 帶 恩 害 笠 数 肩 絹 錘 下 駄 粉 独 楽 鞆 柴 汁 外
(以上四類)

青 赤 秋 朝 汗 兄 雨 桶 牡 蠣 影 蜘蛛 鯉 猿 白 蕎 麦 露 足 袋 鶴 鍋 葱 春 蛭 鮒 前
窓 (以上五類)

《調査方法》

調査方法は以下のようにした。二音節名詞百二十四語の語彙表を渡して次の順序で発音して貰う。

一回目 || 単語だけの発音

二回目 || 助詞「ガ」をつけての発音

筑紫野市暖昧アクセント (稻川)

三回目||短文を即興で作って貰ったの発音

右の様な調査方法は、何回か調査を重ねているうちにこの地帯で適切と思われるに到った方式である。この三回目の発音では被調査者が各語の意味を正確に把握しているか否かがわかる。そしてこの地区で顕著に観察できたことが、三回目の発音では一回目・二回目の発音で聞かれなかったアクセントの相が現われる。

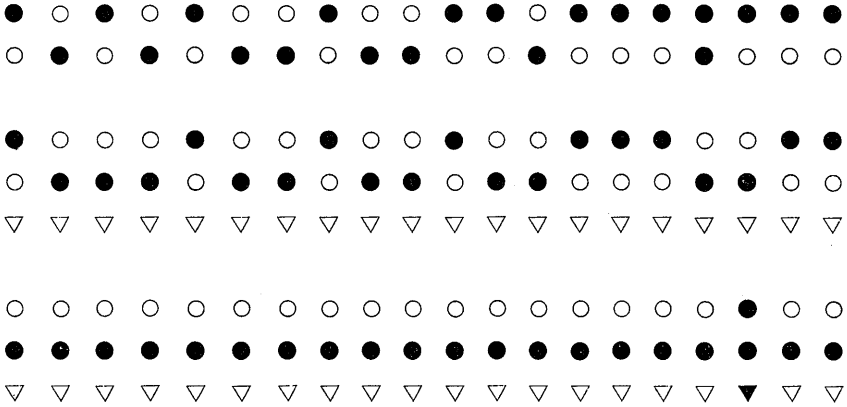
△調査結果▽

筑紫野市西小田の久原茂氏(明治三三年生)の調査結果を次に掲げる。やや長くなるが、この地区のアクセントの実態を知るために必要と思われる。

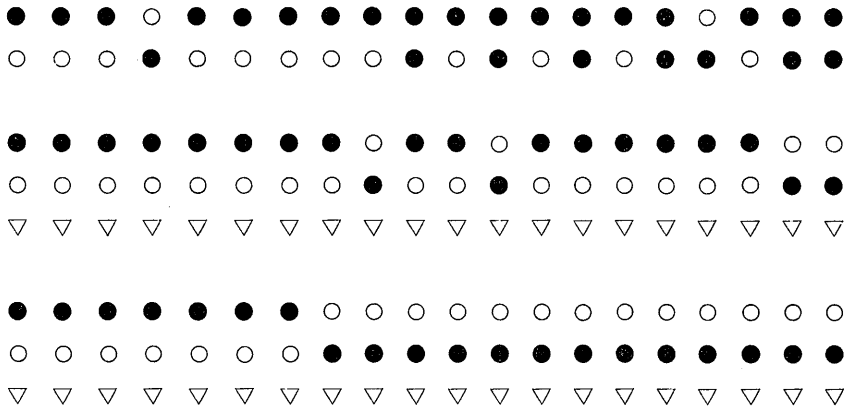
	夏	菊	牛	家	梅	馬	川	駕	風	人	親								
一回目	○	○	○	●	○	○	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二回目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
三回目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
一回目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二回目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
三回目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

枝 靴 村 北 犬 鍵 草 寺 雪 坂 岡 足 音 鞍 知 烏 客 垣 裏 粟
 恵 賊

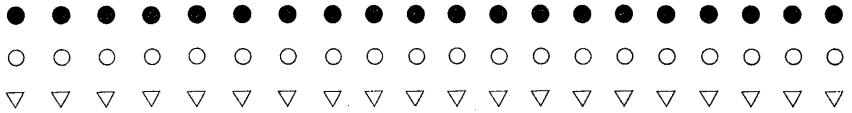
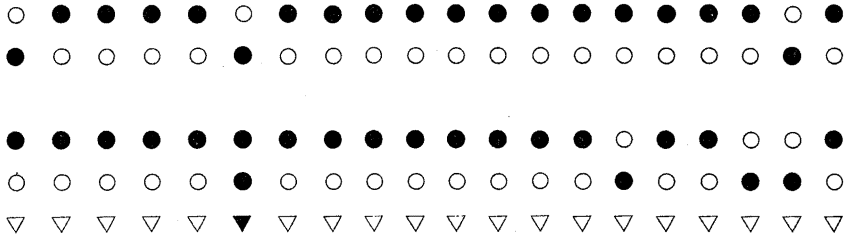
筑紫野市曖昧アクセント(稻川)



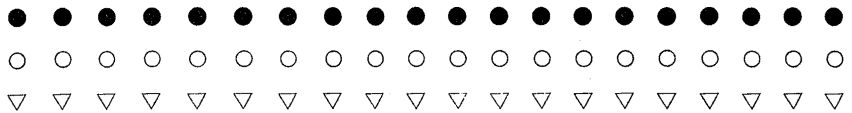
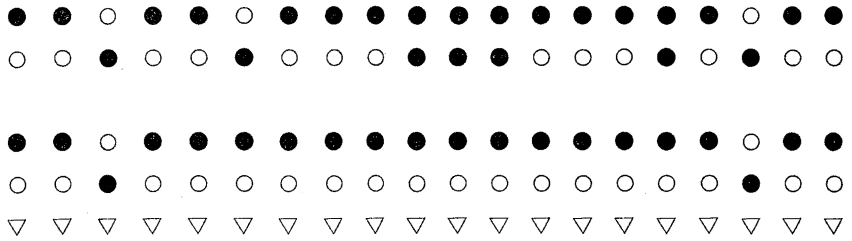
鯉 昼 運 赤 雨 汁 弦 胸 町 下 色 蟹 米 梨 鬼 壁 息 金 橋 歌
 駄



髮 薈 霧 肩 雲 桶 貝 栗 糸 肱 春 春 害 網 柴 鞞 稻 鍋 汗 絹



前 瓜 白 海老 恩 朝 牡蠣 独楽 膿 跡 猿 窓 足袋 帶 冬 兄 魚 外 白 国



蛭	岩	襟	板	葱	鉛	錐	鮎	秋	麻	傷	鶴	露	数	笠	青	蜘蛛	影	蟻	蚊帳	雉子
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	●	○	●	○	○	○	○
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽

注 右の表は三回目の発音の型が同じになる様に並べた。
 ●で高を、○で低を示したわけだが、型の区別の明瞭な地域と較べると、この地域での高低関係はやや不明瞭である。
 二拍名詞単独で●○型の発音をとる場合は、●の方が○より少し強く発音される。

《分析・検討》

右の表を見て分る様に、ある語にその語固有のアクセントが定まっているとは見られない場合が多い。これは曖昧アクセントの特徴といえよう。しかし右の表に分析を加えてみると、そこに曖昧化の進行過程を辿ることができるのである。右の表を分析してみよう。

一回目の発音

○ ● || 27 語

● ● 型 || 15 語

○ ● 型 || 83 語

二回目の発音

○ ● ▽ 型 || 30 語

○ ● ▽ 型 || 1 語

● ● ▽ 型 || 1 語

● ○ ▽ 型 || 92 語

三回目の発音

○ ● ▽ 型 || 56 語

● ● ▽ 型 || 1 語

● ○ ▽ 型 || 67 語

右で目立つ現象は、三回目の発音に中高型の語が最も多いことである。

さて、以下の分析で比較の対象となる筑前アクセントの場合を下に示しておこう。

一回目～三回目の分析を行なうと左B表の如くなる。

△第一回目の発音▽（以下久原氏の場合）

B-1表

五類	四類	三類	二類	一類	内訳
4語	4語	8語	6語	4語	○ ●
5語	4語	0語	3語	3語	● ●
16語	17語	17語	15語	18語	● ○

A表

△筑前アクセント▽

五類	四類	三類	二類	一類	内訳
0 〳 1語	2 〳 3語	22 〳 24語	18 〳 23語	18 〳 24語	○ ● ▽
25 〳 24語	23 〳 22語	3 〳 1語	7 〳 1語	7 〳 1語	● ○ ▽

△第二回目の発音▽

B-2 表

五類	四類	三類	二類	一類	内訳
2	3	9	11	5	○ ●
0	0	0	0	1	○ ● ▼
1	0	0	0	0	● ● ▼
22	23	14	14	18	● ○ ▼

△第三回目の発音▽

B-3 表

五類	四類	三類	二類	一類	内訳
0	6	16	19	15	○ ●
0	0	0	1	0	● ● ▼
24	21	8	4	9	● ○ ▼

B表全体に共通な点は、A表に比較して一・二・三類の頭高型(●○▽)が増加している点である。A表に最も近いものはB-3表、次いでB-2表でありB-1表が最も遠い。

では、B-3表に於いてゴチックで示した部分(A表とのずれの大きい箇所)の語を調べてそのズレの原因を検討する。

一・二・三類で○▽型をとる語

一類||鬮 国 魚 海老 飴 鮎子 蟻 蚊帳

二類||弦 屋 肱 冬 岩

三類||綱 栗 貝 雲 髮 臘 襪

右で棒線を引いた語は第二拍の母音が狭いものである。即ち一〜三類で高起化する語はその殆どが音韻環境から説明がつく。(第2拍狭母音のため、高拍を維持できなくなり、第一拍に高が移動したと考える。これは筑前でも広く見られる現象である。)

四・五類語で○●▽型をとる語

四類||鞆 柴 粉 粟 息 下駄 (五類にはナシ)

これら四類の語の筑前中部でのアクセント状態は、それぞれ $\frac{2}{21}$ 、 $\frac{2}{21}$ 、 $\frac{14}{9}$ 、 $\frac{2}{22}$ 、 $\frac{0}{23}$ 、 $\frac{0}{23}$ (上が中高型、下が頭高型) の数字は福岡市を中心にして筑前アクセント保持者²³名の調査を行った時のもの。なお語文研究⁹⁹号拙稿参照) 。よって「粉」が中高型化するのは筑前との関係から説明できるし、「鞆」

柴」2語は筑前においても頭高型で安定しているとは言えない。以上から全体的にB-3表は曖昧化しているとは言いながら筑前式アクセントをかなり忠実に反映していると言えよう。B-2表にも同じことが言える。ただ、B-1表(単語単独の発音) はやや乱れが大きい。全平型(●●) が四・五類に多い点は注目される。筑前中部部の二拍名詞アクセントを音韻論的に解釈すると、○○」及び○○」▽型であり名詞部分が●●の型を取ることもなんらおかしくはないのだが、久原氏の●●型は、また中央部のものとは異なると思われる。B-2表にも一語であるが五類に全平型(●●▽) が見える。これらの事実は一型音調の相が少しずつ顕われて来ているものと考えられる。

右の被調査者に見られる以上の音調の有り方(ある程度、筑前式音調を反映している) が偶然であるか否か。ほか

の被調査者の場合はどうか。

△川上ウメノ氏▽ 筑紫野市假塚^{カンヅカ}、明治41年生

氏の場合、2回目の発音に最も中高(○●▽)型の出現が多かった。順に検討していく。

一回目

○●型 12 語	●○型 87 語	●●型 23 語
-------------	-------------	-------------

○●型をとる12語の内訳は、

一類	二類	三類	四類	五類
1	4	6	0	0

となり、一・二・三類語のみである。

二回目

○●▽型 23 語	●○▽型 99 語
--------------	--------------

と、頭高(●○▽)型が多い。右の中高(○●▽)型の語の中で四・五類に属するものは、四類 || 粉、五類 || 牡蠣・秋の3語のみ。うち「粉」「牡蠣」の2語は筑前中央部でも 14/9、5/18 の如く揺れの大きい語である。あとの20語は総て一・二・三類語。頭高(●○▽)型の語が多いのは、中央部で四・五類語が本来頭高の上に、一・二・三類語(特に前二者)が筑前では高起化しやすいことで説明がっこう。

三回目の発音

○●▽型 12 語	●○▽型 111 語	○●▽型 1 語
--------------	---------------	-------------

頭高(●○▽)型が群を抜いて多い。○●▽型をとる12語の構成は、

一類 || 梅 味 口 顔

二類 || 川

三類 || 菊 家馬 草 人 親 腕

筑紫野市曖味アクセント(稻川)

四・五類ノナシ

と、一・二・三類語のみである。また3回目の発音で○●▽型に発音され2回目に●○▽型に発音されていた語は無
い。これらの語はそれだけ安定したアクセントを持っていると言える。このように氏の場合、

- ① 一・二・三類語で○●▽↓●○▽の変化が起きている例は多いが、
② 四・五類語で○●▽↓○●●▽の変化が起きている例は殆ど無い。

△山崎喜三郎氏▽筑紫野市原田、明治44年生

氏の場合、1〜3回を通して頭高(●○▽)型が多い。

1 回目の発音

○●	型 3 語	●●	○	型 115 語	●●	●●	型 2 語
----	----------	----	---	------------	----	----	----------

殆ど総ての発音が●○型である。その他の5語、馬・岡・板・北・村等が○●型、●●型をとったのもほとんど偶然
と考えられ頭高一型化が非常に進んでいる。

2 回目の発音

○●	▽	型 16 語	他は	●●	○	▽	型
----	---	-----------	----	----	---	---	---

この中高型には四・五類語はなく一・二・三類語ばかりである

- 一類 || 顔 霧 岡 傷 枝
- 二類 || 石 寺 岩 村 胸
- 三類 || 馬 草 坂 靴 色 裏
- 四・五類 || 無し

ここには筑前アクセントの反映がある。ただし右以外の105語は頭高(●○▽)型でかなり頭高一型に近づいている。

3 回目の発音

○	▽型		57 語
●	▽型		8 語
●	▽型		1 語
●	▽型		55 語

氏の発音のうち3 回目が最もよく筑前式アクセントに対応している。中高(○●▽)型57語のうち四・五類語である語は

四類 || 肩 息

五類 || 桶 足袋 鮒 蛭

の6語のみ。頭高(●○▽)型のうちの1・2・3類語は

一類 || 柿 魚 海老 蟻

二類 || 夏 弦 旅 町 垣 橋

三類 || 髪 膿 襟 雲

の如く2語以外は第二拍狭母音のため高起化したと考えられる語ばかりである。また一類語の「魚」、三類語の「雲」は筑前中央部でもそれぞれ 21/2、17/6と、頭高に発音される例が多いのである。氏の三回目の発音は全く筑前式をとる、と言ってもいい位である。氏には、時を違えて3度のアクセント調査に御協力いただいた。一度目の調査の時、氏にはアクセント認識能力が全く無かったが最後の3度目の調査のときには自らアクセントの違いがあることを認識されるに至った。

△山崎ミヨ子氏▽ 筑紫野市原田 明治44年生

ほとんどの語が、一回目●○型、二回目●○▽型、三回目●○▽型に発音される。それ以外は、

筑紫野市曖昧アクセント(稲川)

一回目 ●●型||赤 人 歌 息 壁 米 青
二回目 ○●▽型||牛 ●●▽型||人 息 壁
三回目 ○●▽型||味 雪 草 色

○●▽型||牛 国 岡 ●●▽型||紙

等で極く僅かではない。かなり一型化が進んでいると考えてよい。しかし、右の発音で興味深いのは、一型に近い状態にあるとは言え、それが筑後地区の一型アクセントとは少しく異なる点である。筑後久留米の一型アクセントでは、

二音節名詞は、ア|メ(飴・雨)、カ|ワ(川・皮)のように第一音節をやや高く発音し、助詞を附けて、そこで区切る発音では、ア|メガ・ア|メニ・ア|メモ；カ|ワガ・カ|ワニ・カ|ワモなどのようにやや高まる山が一音節だけ次に移る。この時やや高まる音節は他の音節よりやや強く発音されている。(平山輝男氏「九州方言音」
調の研究』251~252頁)

か、または平坂に発音される(同書)のであって、氏の如く1~3回目とも殆どが頭高型をとるのは違いがある、ただ少数ではあるが○●▽型(3語)、●●▽(1語)聞かれることも注意をひく。これらの現象は筑前式アクセントが崩壊の度を深め最後に一型化していく過程のある箇所を典型を示しているようである。(言うまでもないことだが頭高型とはいえ、高低の差がそれ程明瞭に現われるわけではない。)

次に一型アクセント地区の被調査者について検討を加える。

△山村シトエ氏▽ 小郡市津古 明治三三年生

氏の音調を聴いていて最も感じられたのは、発音が何か手探りをしているように如何にも不安定に居心地悪く感じられ、各語のとりアクセントが、その語特有の型と考えることはまずできないということである。そういった音調を

聴取していつてその僅かな音調の違いを記録してみたものに果して如何なる傾向が存在するか。ある傾向が窺えるとしてもそれは偶然か聴取の誤りである可能性も、山村氏の場合は考えられる。

一回目 ○ ● 型 || 9 語 — ○ 型 || 100 語 ● ● 型 || 17 語

二回目 ○ ● ▽ 型 || 30 語 ● ○ ▽ 型 || 37 語 ● ● ▽ 型 || 40 語 ○ ● ▽ 型 || 5 語 ○ ○ ▽ || 4 語

一回目の発音で頭高型が非常に多いことは、前の筑前で一型化の進んでいる山崎ミヨ子氏によく似ている。二回目の発音には平板型及び全平型が可成多く聴かれ、その数はここに掲げた被調査者の中で最も多い。中高(○●▽)型をとる語は、四類では「粟」1語、五類では「雨、汗」の2語だけであとは一・二・三類語ばかりである(一類 || 7語、二類 || 11語、三類 || 8語)。頭高(●○▽)型をとる語は、四類(15語)、五類(13語)がほとんどである。一・二・三類語では

一類 || 国 傷 雉子 飴

二類 || 昼 胸

三類 || 池 親 栗 犬

の如く第2拍の母音が狭いものが多い。

アクセントの不安定感、全平型が40語と多いことなど、氏の場合ほとんどもしくは全く一型化が完了していると考へたいが、その場合、右に観察できた傾向をどう解釈するか。とにかく、筑前地区の四人とは聴覚印象が全く異なる。

△米倉信太郎氏▽ 小都市乙隈 明治二四年生

筑紫野市曖昧アクセント(稻川)

氏の場合特徴的に観察できるのは、「二拍名詞」+「ガ」の音調が殆ど中高(○●▽)型に発音されることである。そして頭高(●○▽)型のみをとる語は、弦・昼・濃・髪・運・害・霧・帯・絹・春・国・兄の12語。類の点から見ると一類||2語、二類||2語、三類||2語、四類4語、五類||2語であって、属する類による発音の違いとは考えられない。では音韻環境はどうなっているか。第2拍が撥音である||「運」、第2拍の母音が狭い||その他の11語全部。その為に第2拍に来るアクセントの山が第1拍目に移動したと考えられる。氏の場合は前者の山村氏の不安定な発音に比較すると、むしろその中高(○●▽)型、頭高(●○▽)型の発音は明快に響いた。氏は全くの一型音調の持主と考えていいだろう。

各語に定まったアクセントを持たない人が例えば「2拍名詞+ガ」の発音をする時は次の二通りが考えられる。

(1) 生理的負担が無いように、高く始めるよりは低く始め、その語にまとまりをつけるために真中の拍をやや高く発音し、最後の拍は低く(低は音はそれだけ声帯の緊張が少なくてすむ)終る。米倉氏の発音はこれである。

(2) 3拍とも全く平板に何の変化もつけずに言う。これは声帯の振動数を変化させずに済むから生理的負担が軽い。各被調査者に平板型が聞かれたのはそのためであろう。

以上、筑前・筑後境界地帯のアクセントを各被調査者にわたって概観してきた。それを基に筑前アクセントがどのような過程を経て曖昧の度を深め遂には一型化していくかの考察を試みる。(ほかに夜須町四三島、筑紫野市馬市のアクセント資料があるがここでは省略させていただく)

名詞単独の発音、「名詞+助詞ガ」の発音、その名詞を主語とする短文、これら3つの発音に聴かれる名詞部分のアクセント、或いは二回、三回目の「名詞+ガ」部分のアクセントに異なりが多かった。全体として1回目の発音に

一型化が最も大きい。2回目、3回目では後者の方に各語の筑前式本来のアクセントが表われる率が大きかった。その理由を考えてみよう。

まず、一回目、二回目の発音に聞かれるアクセントについて。この地区では被調査者にアクセントの知覚が殆ど全く無くなっていることに加えて、それらの発音形式が普段の言語生活とはおよそ無縁であるために、また、この種の調査は煩わしいこともあるため、機械的で、生理的にも心理的にも最も容易な発音をしようとする無意識の欲求が働く。その為、画一的な発音の度合が大きくなるものと考えられる。次に3回目の発音に聞かれるアクセントについて。これは、その「短文」（話者自身に作って貰う、そこには話者の創意が働く）という発音形式が3つのうちでも日常の言語生活に近いと考えられ、そのため話者の自然の感情の発露が実現されるのであろう。

しかし、それにもかかわらず其の三回目の発音に実現されるアクセントには筑前中央部に較べると曖昧さと頭高型の増加という傾向があり、漸次一回目や二回目にとられた発音の型に移行していくものと見られる。

さて筑前地区在住の四氏のアクセントを概観して全体としてどの様な事実が読みとれるか。筑前アクセントの型の種類及び型と類の対応を最もよく保っておられるのは久原氏である。1回目、2回目では頭高型が多いものの、3回目の発音では中高型と頭高型が筑前音調とかなり対応して現われてくる。次は山崎喜三郎氏である。1回目、2回目にはやはり頭高型が多い。しかし3回目には中高型をとる語が57語あり、大部分が一〜三類語である。一〜三類で頭高型をとる14語は、うち12語が第二拍に狭母韻を有する。次には川上氏を掲げることができる。一〜三回目を通して頭高型が多いが、中高型（¹は○²型）が、それぞれ12語、23語、12語聞かれた。これらは数として少ないがその大部分が一〜三類所属語である。筑前式アクセントの現われ方が最も少なかったのは山崎ミヨ子氏である。大多数が頭高型をとる。以上四氏を筑前式アクセントに近い順に並べてきたが、またそれは、後者になる程、一型アクセントに近いと考える。四人を順に見ると、段々頭高型が増加していく。同時に、各語本来のアクセント（筑前アクセント）から

のずれ(○●▽型から○●▽型に)も増加するわけだが、その時、一・二・三類語の高起化のみが目立ち、四・五類語の中高型化はそれ程観察できない。こうして大方の語彙が頭高型をとるようになり、アクセントの型が持つ意味は薄れてきて、最後は一型アクセント(久留米式)に移項してしまうものであろう。

この地区の現在のアクセントを見ていくかぎり、アクセントの崩壊過程を以下の如く考えるのが妥当か。筑前アクセントの基本型が頭高型であること、及び筑前での高低アクセント自体が、京阪アクセント・東京アクセントなどに比較すると高低関係が曖昧である(それだけ変化をおこしやすい)こと、のため、中高型の語のうち、最初第2拍の母音が狭いものだけに高起化現象が起こり、続いて広い母音の語も高起化して行った。その結果、大部分の語彙が頭高型になる。この中高型から頭高型への多数の語の移項による規範意識の薄れ、及びアクセント体系が単純になる事(全体として頭高型が殆どを占める)等の結果、「語固有のアクセント」が存続できなくなり、従って全体的にアクセントが曖昧になる。しかも隣接地域は久留米式一型アクセントであるから、その曖昧化に加速度がつき、遂にはこの地区のアクセントも一型になるものと思われる。

この論文は、第20回日本方言研究会で発表したものをもとにしてまとめたものである。なお発表に際しては、平山輝男・徳川宗賢の両氏から貴重な御意見をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。